

春風秋霜

2月号

平成28年2月1日

島田市教育委員会だより
教育長 濱田和彦

春風をもって人に接し、秋霜をもって自らを慎む 佐藤一喬

1 学校訪問を終えて

1月22日（金）の学校訪問で、市内25校全てを教育委員が訪問しました。訪問のために準備していただいた教職員の皆様には感謝します。

昨年との訪問と比較し、気付いたことを3点挙げたいと思います。

- (1) 昨年は、平成25年度全国学力学習状況調査における静岡県の小学校国語A全国最下位を受け、全校で統一した形として授業改善が行われていました。本年度は、個々の先生方の工夫や自由度が増していました。しかし、何のための工夫なのか見えにくい授業もありました。
- (2) 板書を書き写すだけでなく、自分の考えをノートに見やすくまとめている子供が多くなりました。
- (3) 子供の思考が連続する授業が増えた一方で、一部に一問一答式や教師誘導型の授業も見られました。

授業は、教材と子供と教師の願いで作りに上げられるものですから、子供の興味を重視し過ぎることにより、教材の本質がおろそかになってはいけません。教師の願い（子供に付けた力等）を明確にした授業をお願いします。

2 成人式を終えて

今年の成人式は、中学校時代に問題行動が多かった成人が多数出席しました。式典での騒ぎが心配されましたが、予想に反し、ほぼ問題なく式典やアトラクションを終えることができました。しかし、成人式終了後の対応は、課題が残されました。

私は、二中勤務時に問題行動を起こした成人にたくさん会いました。その多くは、確かな成長をしていました。学習意欲がなく、毎朝、親に送ってもらっていたS君は、内装の仕事に就き、先輩から独立を勧められたと、自分の技術力や成長について話してくれました。授業に参加せず、仲間とたむろすることが多かったY君は、金色の袴に金髪、サングラスにマスクと派手な格好で参加していましたが、今年の島田大祭と地域の祭りに参加すると、地域の方々としっかり関係ができていたことを話してくれました。

派手な服装をした成人もいましたが、中学校を卒業してからの5年間で誰もが成長を遂げていると思いました。また、騒いだ成人に関わる中で、彼らとのつながりが大切だと思いました。学校教育課の職員とつながりのあった生徒とのやり取りの中でそのことを強く感じました。学校生活の中でつながる教職員がいれば、大人不信が軽減し、聴く耳を持った大人になると思います。

3 市子連ドッジボール大会に参加して

1月17日（日）に市子連のドッジボール大会がローズアリーナで行われました。市内から22の子ども会から約350人の子供が集まり、ドッジボールを楽しみました。各地区の子ども会は独自に活動を行っていますが、市子連独自の活動として川根の野守の池での親子釣り大会や、今回のドッジボール大会を行っています。

当日は、多くの役員や高校生のボランティアが活動し、子供たちの活動を支えていました。子供たちの健全育成が学校以外でも熱心に行われていることに感謝です。



4 教職員評価校長面談から

市内の全校長と面談し、この一年間の取組について話し合いました。「学校が楽しい」「授業が分かる」の項目に対する子供の評価が、多くの学校で80%以上と確実な成果を挙げていました。『チーム学校』も掛け声だけでなく、形になってきたことを実感しました。また、多くの学校で子供の活動を価値付けることや違和感を大切にされた学校経営がなされていることについても、市教委の考えを受け止めていただいているとありがたく思いました。

島田市の子供たちの安定は、数字で表れていますが、ある校長は、「安定している時ほど教師主導になり易い」と、現状に安心することを戒めていました。数値についても、平均することにより、細かな課題が見えなくなることもあります。教職員は、自分の指導が子供たちにどのように評価されているかを様々な機会に確認する必要があります。子供におもねる必要はありませんが、自身を見つめることは大切だと思います。

5 ふるさと大使故郷を語る（講演会）について

島田市のふるさと大使第1号になっていただいた川合正矩氏の講演会が下記のとおり行われます。日本だけでなく世界を相手に事業展開をしている日本通運会長の川合氏が、ふるさと島田をどのように見ているのか、地方と世界をどのように視点で見ているのかなど、貴重な話を聞くことのできる機会です。キャリア教育の参考になる話も聴くことができると思いますから、多くの先生方の出席を期待しています。

記

- 1 日時 平成28年2月19日（金） 18:00～
- 2 場所 プラザおおりホール
- 3 テーマ 「ふるさと島田市への想い」
- 4 参加料 無料
- 5 その他 詳しくはパンフレットを送信するので参考にしてください。

肘 かけ 椅子

五條 早規子 教育委員

『ようちえん いやや』

新市誕生10周年・金谷図書館開館10周年記念『長谷川義史絵本ライブ』に参加した。1か月以上たった今も、大人が子どもと一っしょに大笑いした会場が浮かんでくる。

このライブで初めて出会った本がある。「ようちえん いやや」と書名が紹介された途端、はい、はい、私もそうです！と打ち明けたい気持ちになった。

初めの幼稚園は近過ぎた。勝手に帰ってきってしまうため、少し遠い幼稚園に通うことになった。今日はちゃんと行くぞ、と準備万端で表に出る。迎えの先生の姿が見えるや否や、家の中へ駆け込み裏口でひと泣き。後から祖母に手を引かれ登園。途中、ガード下で石垣にしがみついてひと泣き。既に閉まっている門にしがみついてひと泣き。小さな開き戸から先生に引き渡され放送室でひと泣き。次の日も、また次の日も。

これが私の幼稚園の記憶、楽しい思い出ではない。会場では、長谷川義史さんが少しおどけて問い掛ける。「なんで泣いているのかな・・・」……………そうか、私の「ようちえんいやや」の訳は、この絵本の園児たちと同じ理由だったかもしれない。そして、更に思いは広がる。もしかしたら、大人たちが「行きたくなければ休んでみる？」と言ってくれたかもしれないし、お絵描きやお遊戯でいいところを見つけて誉めてくれたかもしれない。「明日はこんなお楽しみがあるよ。」と耳打ちしてくれたかもしれないと。そう考えたら、気持ちが少し楽になった。

これからは、幼稚園の前を歩く時、うつむいたり、歯をくいしばったりしなくても、普通に通ることができそうだ。